① 千家元麿
② 平林たい子
③ 片岡鉄平
④ 吉屋信子
⑤ 林芙美子
⑥ 武者小路実篤
⑦ 矢田津世子
⑧ 宮本百合子
⑨ 檀一雄
⑩ 丹羽文雄
⑪ 吉川英治
⑫ 會津八一
⑬ 武田麟太郎
⑭ 黒島伝治
⑮ 村山知義
⑯ 九条武子
⑰ 舟橋聖一
⑱ 中野重治
⑲ 佐多稲子
⑳ 岡本綺堂
㉑ 草野心平
㉒ 太宰治
㉓ 志賀直哉
㉔ 石井柏亭
㉕ 田村泰次郎
㉖ 江戸川乱歩
㉗ 尾崎士郎
㉘ 秋田雨雀
㉙ 横光利一
㉚ 田辺茂一
㉛ 尾崎一雄
㉜ 相馬泰三
㉝ 小川未明
㉞ 有島武郎
㉟ 井伏鱒二
㊱ 葛西善蔵
㊲ 谷崎精二
㊳ 菊池寛
㊴ 永井荷風
㊵ 山本有三
㊶ 小林秀雄
㊷ 青山二郎
㊸ 中原中也
㊹ 田中英光
㊺ 吉井勇
㊻ 斎藤茂吉
㊼ 里見弴
㊽ 岸田國士
㊾ 村山槐多
㊿ 中島敦
(51) 小山内薫
(52) 北原白秋
(53) 大佛次郎
(54) 宇野浩二
(55) 広津和郎
(56) 松井須磨子
(57) 長田幹彦
(58) 西條八十
(59) 佐藤春夫
(60) 三上於菟吉
(61) 長谷川時雨

新宿駅を中心に発展を遂げ、都市化していく新宿には数多くの文学者たちが集まるようになりました。

明治期は、神楽坂や早稲田など、新宿の東側を中心に文学者が暮らしていましたが、大正期になると西側へと広がります。

特に落合地区は目を見張るものがあります。関東大震災以降の社会の変動は、文学にも多大な影響をもたらしました。明治以来の近代文学を否定するアヴァンギャルドの一派や、社会変革を目指したプロレタリア系の文学者が、落合に集まり活動していたからです。彼らは自らの主義主張を標榜する雑誌「文学界」「ナップ」などを次々に発刊していきましたが、離合集散を繰り返し、昭和８年（1933）の官憲の弾圧により、活動は下火になっていきました。同時期、純文学系作家や女流作家も多数落合で暮らし、後に落合文士村と呼ばれるようになりました。

多くの作家が落合を後にしていく中で、長く暮らした作家に林芙美子（1903-1951）がいます。大正 11 年（1922）に広島県尾道から上京した芙美子でしたが、頼りにしていた恋人と別れ、関東大震災で被災し、職業を転々とし新宿のカフェーの女給をしたりすることもありました。しかし、この苦難の経験を生き生きとした筆致で書いた『放浪記』が改造社から発売されるや、一躍ベストセラーとなりました。芙美子が落合に越してきたのは、『放浪記』が発売される直前の昭和 5 年（1930）5 月でした。落合での暮らしを書いた『落合町山川記』では「遠き古里の山川を思い出す心地するなり」とし、亡くなるまでの後半生を過ごしました。『浮雲』『めし』など数々の作品を執筆し流行作家としての地位を築く一方、地域の人々とも気さくに交わり日々の生活を楽しみました。終の棲家となった家は、現在林芙美子記念館として一般に公開されています。

林芙美子

林芙美子記念館

芙美子の書斎

高田馬場に目を移すと、太宰治（1909-1948）が暮らした場所があります。無頼派の作家として今も多くのファンがいる太宰は、津軽の大地主の家に生まれ、昭和 5 年（1930）弘前から東京帝国大学仏文科に入学するため上京しました。その記念すべき第一歩を印した場所が高田馬場にあった常盤館でした。文学者としてデビューする前の短い時間を過ごしただけですが、尊敬する井伏鱒二との面会を果たし、作家へのきっかけをつかむことができました。しかし、共産党のシンパ活動に加わったり、心中事件を起こしたりと目まぐるしい日々の連続でした。

最後に、新宿駅界隈を見てみましょう。関東大震災により、東京は大きな被害を受けましたが、震災からの復興を契機に発展を遂げていきました。当時の新宿の様子を「変る新宿　あの武蔵野の　月もデパートの　屋根に出る」と詠ったのは西條八十（1892-1970）です。西條は、牛込払方町に生まれ長じて後も淀橋に暮らした生粋の新宿生まれ新宿育ちの詩人です。新宿の風景を詩で表現し、今に伝えています。

新宿のランドマークとして今もその役割を果たしているのが、昭和 2 年（1927）現在の地に開業した紀伊國屋書店です。創業者田辺茂一（1905-1981）の活動は書店経営にとどまりません。紀伊國屋出版部から「文藝都市」「行動」など数多の雑誌を刊行し、なかでも昭和 35 年（1960）から 16 年間にわたり刊行した文芸雑誌「風景」は、有名作家から新人作家まで多くの作家に活動の場を提供しました。さらに、書店には画廊と劇場を併設するなど、新宿の文化の発信と発展を牽引した役割は見逃すことはできません。田辺の著書『わが町新宿』には、目覚ましい発展を遂げる新宿の姿が様々なエピソードを交え描写されています。

紀伊国屋書店